

子供（夫婦）と同居していない高齢女性の別居子との関係

野邊 政雄

地方小都市である岡山県高梁市で1997年から1998年にかけて高齢女性を対象に調査をおこなった。本稿では、そのデータを分析し、子供（夫婦）と同居していない高齢女性は別居子とどのような関係を維持し、将来の居住についてどのような意向を持っているかを明らかにした。

Keywords：高齢女性，ソーシャル・サポート，別居子，地方小都市

1 本稿の目的

「家」制度のもとで、長男夫婦と同居して、その世話を受けながら老後をおくるのが、かつては一般的な高齢者の暮らし方であった。しかし、高度経済成長が始まってから、企業に勤める雇用者がだんだんと増加し、子供が家業を継ぐことが少なくなっていった。企業に勤める人々はしばしば企業の都合で転勤を繰り返すので、両親と同居することがむずかしい。その結果、子供（夫婦）と同居しない高齢者が増えてきた。こうした現実から、「家」意識がだんだんと崩れていった。この意識の変化からも、子供（夫婦）と同居しない高齢者が増加していった。それから、人口の年齢構造も要因であるといわれている。かつての日本は、出生率も乳児死亡率も高い「多産多死」社会であった。その後、乳児死亡率が急激に低下し、日本は「多産少死」社会に変わった。1926年から1950年生まれの人々は、この「多産少死」の世代を形成している。この世代の人々は、日本がまさに高度経済成長期であった時代に結婚をし、家族を形成した。この世代の人々の特徴は、前の世代の人々と比べて兄弟姉妹の数が多いことである。だから、多くの人々は両親と同居することなく、新しい世帯を形成していった。こうして、高度経済成長期以降に「直系家族」の形態を取る家族が減少する一方、「夫婦家族」の形態を取る家族が増加していった。そして、子供（夫婦）と同居しない高齢者（夫婦）が増加していった（森岡・望月 1997:

161-162)。数値を示せば、65歳以上の高齢者がいる家族のうち子供（夫婦）と同居している割合は1980年に69.0%であったが、2000年には49.1%にまで減少した。逆に、高齢者が一人暮らしである家族の割合は1980年に8.5%にすぎなかったが、2000年に14.1%になった。また、高齢者夫婦のみの家族の割合は1980年に19.6%であったが、2000年には33.1%になった（内閣府 2002: 27)。このように、近年、子供（夫婦）と同居しない高齢者の割合が増大している。ただし、高齢者は子供（夫婦）と同居することなくずっと暮らしてゆくというわけではなく、年をとって健康を害するようになると、子供（夫婦）と同居することが多くなるという（森岡 1993: 185)。

岡山県^{たかはし}高梁市は、1995年現在人口26,072人の地方小都市である（国勢調査による）。筆者はそこで1997年から1998年にかけて高齢女性を対象に調査をおこなった。本稿では、そのデータを分析し、子供（夫婦）と同居していない高齢女性は別居子とどのような関係を維持し、将来の居住についてどのような意向を持っているかを明らかにしたい。そして、どういった要因によってそうした意識は規定されているのかを解明したい。

2 調査の概要

(1) 調査地と調査方法

高梁市は岡山県西部の内陸にある。高梁町とその

周辺にある8村が1954年に合併し、高梁市が成立した。その後も2度にわたり周辺の農村地域を合併した。高梁市は周辺の農村をこのように合併したので、中山間地の農村が市街地の外側に広がっている。高梁市役所は市街地化が進んだ地域を市街地と定めている。本稿では、高梁市役所が定めたこの地域を「市街地」とする。そして、それ以外の地域を「農村部」とする。

調査対象者を高梁市に居住する65歳以上80歳未満の女性とした。住民基本台帳によれば、1997年11月現在、その年齢帯の高齢女性は2,764人いた。その女性の中から22%にあたる609人を住民基本台帳にもとづいて単純無作為抽出によって選び出した。そして、調査員が1997年12月から翌年の1月31日までの間に該当する女性を訪問し、面接調査をおこなった。有効票数は523であり、無効票数は86であった。回収された有効票数を該当する人がいた調査対象者数（転居を除いた608）で除した割合を回収率とすると、回収率は86.0%であった。標本の特性は、表1に示す通りである。

(2) 調査項目

① 回答者が入院した場合の世話、② 2-3万円の借金、③ 仕事上の話や相談、④ 心配事の相談、⑤ 失望や落胆をしているときの慰め、⑥ 留守のときの家の世話、⑦ 些細な物やサービスの入手、⑧ 交遊、といった8つの日常生活におけるサポート状況で、サポートを仰いだり、交遊をしたりする相手の名前を回答者に尋ねた。①から⑤までの質問では、同居する家族構成員を含めて相手の名前をあげてもらい、⑥から⑧までの質問では、同居する家族構成員を除いて相手の名前をあげてもらった。それと、③の質問は就業している回答者にのみ尋ねた。

さらに、あげられた相手それぞれについて問柄（=種類）と居住場所を尋ねた。問柄は① 同居家族、②（家族外の）親族、③ 近隣者、④ 友人、⑤ 職場仲間（上司や同僚）の5つに分けた。居住場所は、① 歩いて15分以内の場所（本稿では、「近隣地域」と呼ぶ）、②（近隣地域を除いた）高梁市内、③（高梁市内を除いた）岡山県内、④ 岡山県外（外国を含む）のうちのどこかを尋ねた。

表1 標本特性（標本数：523）

回答者の職業		家族形態	
農林漁業的職業	24.5%	回答者のみ	17.4%
事務的職業	1.0%	夫婦のみ	31.5%
販売的職業	2.9%	回答者+子供（夫婦）	6.9%
サービスの職業	3.3%	回答者+子供（夫婦）+孫	16.3%
生産工程従事	2.3%	夫婦+子供（夫婦）	8.0%
専門的職業	0.8%	夫婦+子供（夫婦）+孫	16.8%
管理的職業	0.8%	その他	3.1%
無職	64.6%	回答者の年齢	
回答者の学歴		65-69歳	35.0%
旧制小学校卒業	14.0%	70-74歳	36.3%
旧制高等小学校卒業	50.3%	75-79歳	28.7%
旧制中学校・高等女学校・実業学校卒業	34.0%	平均年齢 71.59歳（標準偏差 4.10）	
旧制高等専門学校・高校・大学卒業	1.7%		
夫婦の年収（単身の場合は、個人の年収。年金を含む）			
100万円以下	27.9%		
101万-200万円	29.4%		
201万-300万円	23.9%		
301万円以上	18.0%		
不明	0.8%		
平均夫婦年収	201.25万円		
（標準偏差 154.42万）			

3 結果

(1) 世帯構成と年齢との関連

回答者はどのような家族形態で暮らしているかを

まず見ておきたい。年齢が高くなると身体的活動能力が低下するから、高齢者は生活をおくるために他人の支援がより必要となる。そこで、年齢が高い回

答者ほど、子供（夫婦）と同居していると予想できる。さて、高梁市は市街地と農村部から構成されていることは前述の通りである。そこで、市街地と農村部に住む回答者に分けて、世帯構成と年齢との関連を集計することにする。年齢は、①「65歳から69歳」、②「70歳から74歳」、③「75歳から79歳」に3分する。世帯構成は、野口(1991)の用いた世帯類型を援用し、①「単身」、②「夫婦のみ」、③「夫婦と同居子」、④「本人と同居子」に4分する¹⁾。

表2は、年齢帯ごとに回答者の世帯構成がどのように分布するかを示している。同表の上段は市街地の回答者の集計結果であり、下段は農村部の回答者の集計結果である。同表から、次の3点を読み取ることができる。

表2 年齢と世帯構成との関連（単位：%）

年齢	65歳から69歳	70歳から74歳	75歳から79歳
(市街地の回答者)			
単身	21.4	27.6	26.4
夫婦のみ	28.6	34.5	15.1
夫婦と同居子	28.6	19.0	17.0
本人と同居子	21.4	19.0	41.5
該当する人数(人)	56	58	53
(農村部の回答者)			
単身	8.2	15.0	22.0
夫婦のみ	47.5	32.3	24.2
夫婦と同居子	29.5	30.7	20.9
本人と同居子	14.8	22.0	33.0
該当する人数(人)	122	127	91
(回答者全体)			
単身	12.4	18.9	23.6
夫婦のみ	41.6	33.0	20.8
夫婦と同居子	29.2	27.0	19.4
本人と同居子	16.9	21.1	36.1
該当する人数(人)	178	185	144

第1に、回答者の年齢構成が一般的な動向とは相違していることである。一般的には高齢の人ほど人数が少なくなるはずであるが、市街地でも農村部でも「65歳から69歳」までの回答者は「70歳から74歳」の回答者よりも多い。地方小都市では人口の流出が続いているが、高齢者の中でも若い人々の人口流出がとくに多かったから、回答者にそのような偏りが生じたのであろう。

第2に、市街地の回答者の間で、年齢による世帯構成の変化が一般的な動向とは相違していることである。年齢が高くなるにつれて、「夫婦のみ」の世帯の割合は一般的には低くなる。しかし、市街地では「夫婦のみ」で暮らす回答者の割合は、「65歳から69歳」の回答者よりも「70歳から74歳」の回答者のほうが高い。こうした回答者の偏りは、年齢の若い「65歳から69歳」の回答者のうち「夫婦のみ」で暮らす回答者がとくに多く流出したから生じたと考えられる。

第3に、いずれの年齢帯でも、「単身」で暮らす回答者の割合は農村部よりも市街地のほうが高いことである。とくに、「65歳から69歳」と「70歳から74歳」の年齢帯では、その差は大きい。

(2) 別居子の居住場所

子供（夫婦）と同居していない回答者の別居子はどこに居住しているかを見ておきたい。別居子は1人とは限らないが、分析をしやすくするために、最も近くにいる別居子はどこに居住しているかを集計する。別居子の居住場所は、① 近隣地域、② 高梁市内、③ 岡山県内、④ 岡山県外、⑤ 別居子はいない、の5つにまとめた。子供（夫婦）と同居していない回答者について、世帯構成と回答者の居住場所別に別居子の居住場所を集計し、表3に示す。同表から、最も近くの別居子が岡山県の内部（つまり、「近隣地域」、「高梁市内」、「岡山県内」のいずれか）

表3 最も近くにいる別居子の居住場所（単位：%）

別居子の居住場所	「単身」の回答者		「夫婦のみ」の回答者		子供(夫婦)と同居していない回答者	
	市街地	農村部	市街地	農村部	市街地	農村部
近隣地域	7.1	8.2	15.9	3.3	10.5	4.5
高梁市内	19.0	16.3	13.6	24.0	15.8	23.2
岡山県内	40.5	51.0	40.9	59.5	41.1	55.9
岡山県外	23.8	14.3	22.7	9.9	22.1	11.3
子供はいない	9.5	10.2	6.8	3.3	10.5	5.1
該当する人数(人)	42	49	44	121	95	177

(注) 子供（夫婦）と同居していない回答者には、「単身」や「夫婦のみ」の回答者だけでなく、子供（夫婦）と同居していないその他の回答者（つまり、注(2)であげた16人）も含む。

にいる回答者の割合は、市街地で67.4%であり、農村部で83.6%であるといったことが分かる。

(3) 別居子夫婦からのソーシャル・サポートの入手

同居する子供に次いで、別居子は高齢者にとって重要な交際相手であるだけでなく、サポートの大切な源泉でもある（前田 1988; 野口 1991; 横山ほか 1994）。そして、別居子が地理的に近くに居住しているほど、高齢者はその子供と頻繁に交際するだけでなく、その子供からサポートを入手しやすいといわれている（古谷野ほか 1995; 横山ほか 1994）²⁾。ここでは、別居子の居住場所の違いによって、子供（夫婦）と同居していない回答者のサポート入手がどのように異なってくるかを高梁市のデータで見たい。

さて、「岡山県内」に住む別居子の大部分は、県南にある岡山市、倉敷市、総社市にいた（野邊 2003）。これらの場所から高梁市の実家へ車で1時間以内に行くことができるから、高齢女性は「岡山県内」に住む別居子（夫婦）と頻繁に会い、そうした別居子（夫婦）からサポートを入手しやすいだろう。ところが、「岡山県外」に住む別居子とは頻繁に会うことができないから、そうした別居子夫婦からはサポートを入手しにくいことが考えられる。このことを考慮して、子供（夫婦）と同居していない回答者を、① 最も近くの別居子が岡山県の内部にいる回答者、② 最も近くの別居子が「岡山県外」にいる回答者、③ 子供がいない（つまり、同居子も別居子もいない）回答者に3分した。はじめの2

群の回答者それぞれが8つの状況でいずれかの別居子夫婦からサポートを入手できる割合を集計し、表4に示す。両群の間にその割合で差があるかどうかの検定をおこなったところ、「入院時の世話」、「借金」、「心配事の相談」、「留守時の家の世話」で有意差があった。そして、前者は後者よりもいずれかの別居子からそうしたサポートを入手できた。

別居子夫婦からサポートを入手できなくとも、その他の人々からサポートを入手することもできるから、いずれかの社会関係を利用してサポートを入手できる割合には3群の間で差がないかもしれない。このことを検証するために、3群それぞれの回答者が8つの状況でいずれかの社会関係からサポートを入手できる割合を集計し、表5に示す。まず、① 最も近くの別居子が岡山県の内部にいる回答者と、② 最も近くの別居子が「岡山県外」にいる回答者の間に、その割合で差があるかどうかの検定をおこなったところ、「借金」と「留守時の家の世話」で有意差があった。そして、前者は後者よりもいずれかの社会関係を利用して「借金」をすることができたが、逆に、後者は前者よりもいずれかの社会関係の相手に「留守時の家の世話」を頼ることができた。次に、① 最も近くの別居子が岡山県の内部にいる回答者と、③ 子供がいない回答者の間に、いずれかの社会関係からサポートを入手できる割合で差があるかどうかの検定をおこなったところ、「入院時の世話」で有意差があった。そして、前者は後者よりもいずれかの社会関係の相手に「入院時の世話」をしてもらうことができた。

表4 最も近くにいる別居子の居住場所別に見る別居子夫婦からサポートを入手できる割合（単位：%）

別居子の居住場所	入院時の世話	借金	仕事上の話と相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	物・サービス入手	交遊	人数
岡山県の内部	73.6	46.7	1.4	24.5	30.2	11.3	11.8	10.8	212
岡山県外	36.6	12.3	0	9.8	17.1	0	2.4	12.2	41
検定	$p<.01$	$p<.01$	N. S.	$p<.01$	N. S.	$p<.01$	N. S.	N. S.	

（注）子供（夫婦）と同居していない回答者を集計した。 χ^2 検定をおこなった。

表5 最も近くにいる別居子の居住場所別に見る社会関係を結ぶいずれかの相手からサポートを入手できる割合（単位：%）

別居子の居住場所	入院時の世話	借金	仕事上の話と相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	物・サービス入手	交遊	人数
①岡山県の内部	93.9	84.9	14.6	76.9	79.7	75.5	53.3	72.6	212
②岡山県外	87.8	70.7*	19.5	82.9	85.4	90.2*	61.0	68.3	41
③別居子はいない	73.7**	78.7	10.5	73.7	63.2	68.4	36.8	57.9	19

（注）子供（夫婦）と同居していない回答者を集計した。最も近くの別居子が岡山県の内部にいる回答者とサポートを入手できる割合で有意差があるかどうかの検定をおこなった。 χ^2 検定をおこなった。

** $p<.01$, * $p<.05$

(4) 将来の暮らし方についての意向

子供（夫婦）と同居していない回答者は別居子（夫婦）と同居することを希望しているかどうかを見ておきたい。調査時点で子供（夫婦）と同居していない回答者に、「将来的に別居子（夫婦）と同居したいと考えているか」を質問した。この質問に対する回答を世帯構成と回答者の居住場所別に集計し、表6に示す。ここでは、別居子のいる回答者についてのみ、集計をおこなっている。同表から、次の3点を読み取ることができる。

第1に、「単身」で暮らしている場合でも、「夫婦のみ」で暮らしている場合でも、「今でも可能なら同居したい」回答者は農村部に多く、逆に、「同居は全く考えていない」回答者は市街地に多いことである。とくに、「単身」で暮らす回答者の間で、その差が大きい。数値をあげると、「単身」で「今での可能なら同居したい」回答者は、市街地では13.2%にすぎないが、農村部で31.8%である。そして、「単身」で「同居は全く考えていない」回答者は、市街地で28.9%であるが、市街地では11.4%にすぎない。

第2に、世帯構成や回答者の居住場所に関わりな

く、「将来、何らかの生活条件の変化があったときに同居を希望する」回答者はだいたい半数であることだ。「自分が健康を害し、家事などが不自由になったとき、同居したい」、「夫が健康を害したら、同居したい」、「1人になったら、同居したい」、「1人になって、自分が健康を害したり、家事などが不自由になったとき、同居したい」という回答は、「将来、何らかの生活条件の変化があったときに同居を希望する」としてまとめることができる。それを希望する「単身」の回答者は、選択肢のうち「自分が健康を害し、家事などが不自由になったとき、同居したい」を選ぶことになってしまうが、そのように回答した「単身」で暮らす回答者の割合は、市街地で55.3%であり、農村部で56.8%である。また、「夫婦のみ」で暮らす回答者で「将来、何らかの生活条件の変化があったときに同居を希望する」回答者の割合は、市街地で48.8%であり、農村部で53.8%である。

次に、将来における居住予定場所を見ておきたい。子供（夫婦）と同居していない、別居子のいる回答者だけを取り出し、子供（夫婦）との同居の意向別に将来における居住予定場所を集計し、表7に示す。

表6 子供（夫婦）との同居希望（単位：%）

子供（夫婦）との同居希望	「単身」の回答者		「夫婦のみ」の回答者		子供（夫婦）と同居していない回答者	
	市街地	農村部	市街地	農村部	市街地	農村部
今でも可能なら同居したい	13.2	31.8	12.2	23.1	12.9	26.2
自分が健康を害し、家事などが不自由になったとき、同居したい	55.3	56.8	17.1	22.2	34.1	31.0
夫が健康を害したら、同居したい	—	—	0	4.3	0	3.0
1人になったら、同居したい	—	—	12.2	12.8	5.9	8.9
1人になって、自分が健康を害したり、家事などが不自由になったとき、同居したい	—	—	19.5	14.5	12.9	11.3
同居は全く考えていない	28.9	11.4	26.8	17.1	25.9	14.9
その他	2.6	0	4.9	3.4	3.5	2.4
答えなし	0	0	7.3	2.6	4.7	2.4
該当する人数（人）	38	44	41	117	85	168

（注）子供（夫婦）と同居していない、別居子のいる回答者の集計である。表3の人数と差があるのは、表6では別居子のいない回答者を除いているからである。

表7 子供（夫婦）と同居していない回答者の将来における居住予定場所（単位：%）

居住予定場所	「市街地」の回答者		「農村部」の回答者		子供（夫婦）と同居していない回答者	
	いずれ同居を希望	同居は考えていない	いずれ同居を希望	同居は考えていない	いずれ同居を希望	同居は考えていない
現住所に住むつもり	83.9	100	92.6	100	90.1	100
できれば転居したい	1.8	0	3.0	0	2.6	0
転居予定	3.6	0	0	0	1.0	0
答えなし	10.7	0	4.4	0	6.3	0
該当する人数（人）	56	22	135	25	191	47

（注）子供（夫婦）と同居していない、別居子のいる回答者の集計である。表6の人数と差があるのは、表7では子供（夫婦）との同居希望が「その他」や「答えなし」の回答者を除いているからである。

「今でも可能なら同居したい」と「将来、何らかの生活条件の変化があったときに同居を希望する」を「いずれ同居することを希望する」として、子供（夫婦）との同居の意向を「いずれ同居することを希望する」と「同居は全く考えていない」の2つにまとめてある。表7から、回答者の居住場所に関わりなく、「いずれ同居することを希望する」回答者のほとんどが「現住所に住むつもり」であることを読み取れる。数値をあげれば、「いずれ同居することを希望する」回答者のうち「現住所に住むつもり」である割合は、市街地で83.9%であり、農村部で92.6%である。「同居は全く考えていない」回答者はすべて「現住所に住むつもり」である。

4 検討

第1に、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の別居子はどこに居住しているかを検討したい。表3によれば、子供（夫婦）と同居していない高齢女性のうち、最も近い別居子が岡山県の内部に住んでいる割合は、市街地で67.4%、農村部で83.6%であった。「単身」や「夫婦のみ」で暮らす高齢女性だけを見ても、その割合はほぼ同じであった。これらの数値から、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の多くには相対的に近くに別居子がいるといえる。前述のように、「岡山県内」に住む別居子の大部分は、県南にある岡山市、倉敷市、総社市に住んでおり、これらの場所から高梁市の実家へ車で1時間以内に行くことができるから、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の多くは別居子と頻繁に会いやすいといえる。

第2に、別居子の居住場所の違いによって、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の別居子夫婦からのサポート入手がどのように異なってくるかを検討したい（表4と表5を参照）。まず、子供（夫婦）と同居していない高齢女性のうち、最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性は最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性よりも「入院時の世話」、「借金」、「心配事の相談」、「留守時の家の世話」といったサポートを別居子夫婦から入手できた。さらに、いずれかの社会関係を利用してサポートを入手できる回答者の割合を見たところ、前者は後者よりも「借金」をすることができたが、逆に、後者は前者よりも「留守時の家の世話」を頼むことができた。その他の状況では、いずれかの社会関係の相手からサポートを入手できる割合で両者の間に有意差はなかった。次に、当然のことであるが、子供がいない高齢女性は別居子からサポートをまったく入手することはできない。最も近くの別居子が岡山県

の内部にいる、子供（夫婦）と同居していない高齢女性は子供がいない高齢女性よりもいずれかの社会関係を利用して「入院時の世話」をしてもらえたが、その他の状況ではサポートを入手できる割合で両者の間に有意差はなかった。

これらの結果から、次のことがいえる。子供（夫婦）と同居していない高齢女性のうち、最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性は、最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性よりも別居子夫婦からサポートを入手しにくいし、子供がいない高齢女性は別居子夫婦からサポートをまったく入手できない。けれども、「入院時の世話」と「借金」以外の状況では、別居子夫婦以外の社会関係を利用して別居子夫婦からサポートを入手できないことをかなり補完できるので、いずれかの社会関係を利用してサポートを入手できる回答者の割合では、最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性や子供がいない高齢女性が最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性よりも低いということとはなかった。ただし、「入院時の世話」や「借金」といった負担の重い手段的サポートの提供には、関係が永続的である子供が最適であるから、その他の社会関係が別居子夫婦のそのサポート提供機能を完全には代替できなかった。だから、最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性は最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性や子供のいない高齢女性よりもいずれかの社会関係の相手によって「入院時の世話」あるいは「借金」をしてもらうことができたのだらう。

第3に、「単身」で暮らす高齢女性や将来も子供（夫婦）と同居しないで暮らそうとしている「単身」の高齢女性は農村部よりも市街地で多かったが（表6を参照）、その理由を考えてみたい。

まず、生活関連施設の整備状況が地域によって差があることをあげることができる。日常生活において、買い物は欠かせない。さらに、高齢者に特有の生活問題として、病院への通院といったことがある。高齢者はたいてい体のどこかが悪いので、定期的に病院へ通院している。市街地では商店、スーパーマーケット、病院などの生活関連施設が比較的近くにあって生活がしやすいから、高齢者は自力で生活をおくりやすい。これに対し、農村部ではそうした施設がほとんどないから、他者からの支援なしではそこで暮らしてゆきにくい。農村部に単身で住む高齢女性は他者からサポートを得にくいから、子供（夫婦）に実家に戻って同居してもらうか、そこにとどまり続けるために、子供（夫婦）に同居することを期待せざるをえない。

次に、農村部の高齢者は市街地の高齢者よりも「家」意識を強く持っていることをあげることができる。筆者は標本調査の後に、標本の一部を対象に事例調査をおこなった（野邊 2000a; 2000b; 2001）。それによると、農村部の高齢者は「家」意識を持っており、それが生活の中に生きていた。例えば、農繁期には、子供たちは実家に戻って農作業を形式的であれ手伝っていた。また、農村部の高齢者たちは長男夫婦が「家」を継ぐのが当然であると考えており、支援が必要なときには長男にサポートを求めるのがあたりまえだと考えていた。このように、農村部の高齢女性は子供（夫婦）との同居を強く期待するから、そうした女性の多くは実際に子供（夫婦）と同居していたり、将来的には別居子（夫婦）と同居することを期待していたりする。

これらの2つの理由から、「単身」で暮らす高齢女性や将来も子供（夫婦）と同居しないで暮らそうとしている「単身」の高齢女性は、農村部よりも市街地で多かったのだろう。

これまでは、市街地と農村部に居住する回答者の差異を強調してきた。しかし、これによって、子供（夫婦）と同居していないかなり多くの高齢女性が別居子（夫婦）と「いずれ同居することを希望」しているという両者の共通点を見落としてはならない。子供（夫婦）と同居していない、別居子のいる高齢女性のうち、そうしたことを希望する高齢女性は市街地で61.1%、農村部で76.8%にものぼるのだ（表6を参照）。

第4に、高齢女性はどのような形で別居子（夫婦）と同居することを望んでいるかを検討したい（表6と表7を参照）。かなり多くの高齢女性は別居子（夫婦）と「いずれ同居することを希望」しており、その大多数は現住所にずっと住み続けるつもりであった。そうすると、高齢女性は別居子（夫婦）のもとに転居して同居するのではなく、別居子（夫婦）に実家に戻ってもらい同居することを希望しているということになる。

筆者がおこなった事例調査によれば（野邊 2000a; 2000b; 2001）、多くの高齢女性は慣れ親しんだ生活環境のもとで暮らし続けたいとか、これまでに築き上げた友人などとの人間関係を失いたくないという理由から、現住所にずっと住み続けることを望んでいた。そこで、かなり多くの高齢女性が別居子（夫婦）といずれ同居することを望んではいても、自らが別居子（夫婦）のもとに転居して、同居しようとはしていなかったのだろう。

5 結論

本稿の目的は、地方小都市に住む、子供（夫婦）と同居していない高齢女性は別居子とどのような関係を維持し、将来の居住についてどのような意向を持っているかを明らかにし、そうした意識はどういった要因によって規定されているかを明らかにすることであった。岡山県高梁市の高齢女性のデータを分析することによって、次の点を明らかにした。

- 1) 子供（夫婦）と同居していない高齢女性のうち、最も近い別居子が岡山県の内部に住んでいる割合は、市街地で67.4%、農村部で83.6%であった。このことから、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の多くは別居子と頻繁に会いやすいといえる。
- 2) 子供（夫婦）と同居していない高齢女性のうち、最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性は最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性よりも「入院時の世話」、「借金」、「心配事の相談」、「留守時の家の世話」といったサポートを別居子夫婦から入手できた。また、子供のいない高齢女性は別居子からサポートを当然のことながら入手できない。ところが、「入院時の世話」と「借金」を除いて、いずれかの社会関係を利用してサポートを入手できる回答者の割合では、最も近くの別居子が「岡山県外」にいる高齢女性や子供がいない高齢女性が最も近くの別居子が岡山県の内部にいる高齢女性よりも低いということとはなかった。
- 3) 「単身」で暮らす高齢女性や将来も子供（夫婦）と同居しないで暮らそうとしている「単身」の高齢女性は農村部よりも市街地で多かった。ただし、高齢女性の居住場所に関わらず、子供（夫婦）と同居していない高齢女性の大部分はいずれ子供（夫婦）と同居することを希望していた。
- 4) かなり多くの高齢女性は別居子（夫婦）といずれ同居したいと考えていた。そして、別居子（夫婦）に実家に戻ってもらい同居することを希望していた。

【注】

1) 4つの類型に当てはまらなかった16人の回答者の家族構成は次の通りであった。

回答者+本人の姉（または妹）	4人
回答者+夫+本人の母親	3人
回答者+夫+夫の母親	2人
回答者+本人の姪	1人
回答者+本人の兄（または弟）+その妻	1人
回答者+夫+その兄（または弟）	1人
回答者+夫+本人の姉（または妹）	1人
回答者+夫+息子の妻+孫	1人
回答者+夫+孫	1人
回答者+息子の妻+孫	1人

表3の「子供（夫婦）と同居していない回答者」には、「単身」と「夫婦のみ」の回答者に加えてこれら16人の回答者が含まれている。

2) 別稿で筆者がおこなった分析によれば（野邊2003），別居子が地理的に近くに住んでいるほど，その別居子から手段的サポートだけでなく，情緒的サポートも入手しやすかった。

【引用文献】

- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・児玉好信. 1995. 「老親子関係に影響する子ども側の要因」『老年社会科学』第16巻第2号 136-145頁。
- 前田尚子. 1988. 「老年期の友人関係—別居子関係との比較検討」『社会老年学』第28号 58-70頁。
- 森岡清美. 1993. 『現代家族変動論』ミネルヴァ書房。
- 森岡清美・望月嵩. 1997. 『新しい家族社会学 四訂版』培風館。
- 内閣府. 2002. 『平成13年版 国民生活白書 家族の暮らしと構造改革』ぎょうせい。
- 野邊政雄. 2000a. 「高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らし」『研究集録』第113号 岡山大学教育学部。
- 野邊政雄. 2000b. 「高梁市の高原部に住む一人暮らしの高齢女性の生活」『研究集録』第114号 岡山大学教育学部。
- 野邊政雄. 2001. 「高梁市の市街地に住む高齢女性の暮らし」『研究集録』第116号・第117号 岡山大学教育学部。
- 野邊政雄. 2003. 「地方小都市の高齢女性と別居子との関係」『ソシオロジ』第47巻第3号 55-69。
- 野口裕二. 1991. 「高齢者のソーシャル・サポート—その概念と測定—」『社会老年学』第34号 37-48頁。
- 横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野亘. 1994. 「老親と別居子の関係—団地に居住する女性老人の場合—」『老年社会科学』第15巻第2号 119-123頁。